

ポルトの街で

ブーム先駆けの苦勞味わう

昌幸さん(四十四歳)はポリア移民の両親に連れられて八歳でブラジルにやってきました。ポリア生まれの二世。妻の正之さん(三十八歳)は栃木県出身。結婚を機に二十歳でブラジルに移住。ブラジルでの生活ももう十八年になる。

夫妻が出会ったのは日本デカセキブームの走りだった九〇年代初頭。昌幸さんは東京都市のホンダの下請け会社で六年間勤務。正之さんも高校卒業後の同期に同社で働きはじめ、二人は出会った。

社内恋愛が結婚に発展するのはよくある話だが、若く国籍も異なり、しかも暗いイメージがつきまとい、出稼ぎ者という人々の場合はそう簡単に事が運ばなかった。

二年ほどの付き合いの末、昌幸さんはデカセキ生活を終えブラジルに帰国。後に残された正之さんは「毎日すく泣いて、どうしたらいいか真剣に悩んだ」。その辛句、家族、会社、友達に、通ずる手紙を宛て、黙ってブラジルに飛んだ。投函した手紙は、日後に着

き、家族は大混乱。父は仏壇の前で泣きつはなし、叔父は「帰ってこなければ殺しに行くぞ」といふほどと正之さんは振りかえる。

正之さんは入社の際に、「くれぐれも悪い虫がつかないように」と頼んであった叔父は、全責任を会社に追求めた。そのため会社の上司が「頼むから帰ってきてくれ」と、人を連れ戻しにブラジルまでやってきた。

そうして正之さんの実家で、人を開いて親戚、同の大家族会議が開かれた。会議は、時間にも及び、止



山内正之、流斗、笑利、昌

座に慣れない昌幸さんは悪戦苦闘。それでも会議の末、人の結婚は許された。

「人娘でみんなからかわいがられて育ったし、手

元に置いておきたかったみたい」と正之さん。当時ブラジルのイメージはアマゾンぐらいいしかなかったため、「あんなこと行つて何するの」と親戚、同が心配し

第十三回ブラジル紅白歌合戦(日伯音楽協会、ブラジル日本アマチュア歌謡連盟共催、NHKなど後援)が十二月二日午前九時から、文協記念大講堂(聖市リベルターデレサンジョアキン街三八番)で開催される。入場無料。

歳末の風物詩
紅白各50組

日伯友好交流みやげに

元本紙記者 諸井さん埼玉県議で来伯



十年ぶりに古巣(本紙編集部)に足を踏み入れた諸井氏

かなブラジル経験から事務局長に選出された。小学校一年生からサッカーをはじめ、学生時代は部活動一本。大学時代には、サンパウロ、リオデジャネイロでサッカー修行までしたという経歴の持ち主。

大学卒業後は、毎日新聞社系列の出版社に就職。その後、一九九六年から二年間、研修員として本紙社会部記者として勤務した。帰国後、国会議員、政治家の秘書を務め、今年の埼玉県県議会選挙に自民党から出馬、当選を果たした。

政治界入りのきつかけはブラジルだという。ブラジルに来ていなかったら、普通のサラリーマンをしていたと思う」といふ諸井氏。外国に出て初めて日本人の長所、短所が見えてきた。

このほど発足した埼玉(羽生市出身、三十八歳)県議会日伯友好議員連盟は、議員としての任務経験は半年あまりだが、その豊富

「ブラジル人の持つている心、人とのつながりなどは日本人がなくてしま

まったもの。日本人として、日本のために何かをしたいという思いで政治に関わるようになったと帰国後の心境の変化を語った。

本紙での記者体験では、移民九十周年の折の天皇、皇后両陛下のご来伯や、タム航空の墜落事故での取材、夜中に起こされて仕事にあたった寄宿舎生活などを挙げ、「懐かしい思い出」と回顧した。

来伯はほぼ十年ぶりが、ポルトガル語のほうもまだまだ達者。「リベルターデ」来ると「ブラジル」に帰って来たという思いになる」と、昔馴染みの飲食店名を挙げ、感慨に耽る場面も。

議員連盟事務局長という任務については、「この来伯をきっかけに、埼玉県と県人会の交流を深めることに微力ながら尽力したい」と熱を込めて語った。

最高点には『かずま賞』

かずま師3回忌俳句大会開催

蜂鳥誌友会(富重久子会長)は初代会長の富重かずま師の三回忌を迎えて、十二月十五日午前八時(受け付け開始)から、文協会議室(聖市サンジョアキン街三番)でかずま師三回忌追悼俳句大会を行う。

兼題は「かずま忌、薔薇、羅薄衣」を通して五句二当口持参する。また、大会不参加の人で投稿したい人は蜂鳥誌友会(聖市ジャルシン・アメリカ区オスカール・フレイレ街二〇七七番)アパート二五号室。電話11-3064-91



案内の関係者

例年、人ほぼの日本が、み紅組、送協会、競う。紅組(26)を、会、(会場)む。特、は「か、ほ、な、会、池、山本